

各地で話題の病虫害

モンキアワフキ

学名：*Aphrophora major* UHLER

1999年9月、鳥取県八頭郡にある県園芸試験場内のカキ園で、果実にかメムシ類に加害されたような吸汁痕が発見され、採取した虫は埼玉大学林正美教授によりモンキアワフキと同定された。国内での本虫によるカキ生果実への被害例は初めてである。その後も同場内のカキでその被害が毎年認められ、2001年には八頭郡都家町及び河原町の花御所と西条の2品種のカキに対して同様な被害が確認された。



鳥取県園芸試験場 伊澤宏毅氏提供

本種は国内に広く分布し、一般にヤナギ類、ヨモギ類、イネ科牧草やキク科の雑草等を食する。

成虫は体長約12mm、茶褐色で前翅は革質化して硬く、中央部よりやや先端に黄色小紋を有する。年1化性で成虫は初夏から秋に出現し、気温の多少低くなってきた秋に活発に動き回るようになる。

果実への加害は、かメムシ類が主にへた部であるのに対し、本種は赤道部から果頂部を吸汁する。加害された果実は吸汁部位が陥没し、商品価値を著しく損なう。

アワフキムシ類幼虫は泡沫中に生息しており、容易に発見できることから、アワフキムシ類では、幼虫の捕殺を防除手段の一つとしている。また、本年も本虫による被害が予想されるが、登録農薬がないため、その防除方法について県試験場等で検討中である。

スイカ炭腐病(仮称)

学名：*Macrophomia phaseolona*

英名：Charcoal rot

1997年に長野県のスイカ栽培ほ場において発生を確認された黒点根腐病の防除対策を進める中で、被害株の根部中に黒点根腐病の黒点症状とは異なる黒変症状が多数観察された。このため、調査を行った結果、糸状菌の一種 *Macrophomina phaseolina* による炭腐病であることが判明した。国内での本菌によるウリ科野菜類への被害が確認されたのは、今回が初めてである。



長野県松本農業改良普及センター提供

本菌は、亜熱帯及び熱帯地方を中心に広く分布し、サツマイモやマメ科植物及び木本植物等約300種以上の植物に対して寄生性のある多犯性の土壌病原菌である。また、生育温度は10～45℃、適温は35℃と高温性である。

本病徴は、成熟期から収穫間際にかけて地上部に萎凋症状として現れ、被害の甚だしい時は枯死する。発病株の根部は表面が黒色に変化し、一見黒点病や炭疽病と混同しやすいが、罹病部位の根部表皮を剥がすと、木炭粉状で直径約0.1mm、黒色の微小菌核の形成が観察されることで、本病と確認できる。

菌核は土壌中に残り越冬するため、翌年の伝染源と成り得ることから連作は避け、休耕畑には寄生性の認められない作物の選択が必要である。また、罹病株の抜き取り及びつる割病防除に準じた土壌消毒を徹底することが有効である。